



TITLE:

<講演4>ポスト・インド洋津波の時代におけるbosai(防災)

AUTHOR(S):

山本, 博之

CITATION:

山本, 博之. <講演4>ポスト・インド洋津波の時代におけるbosai(防災). 京都大学附置研究所・センターシンポジウム: 京都からの提言 -21世紀の日本を考える (第6回)- 「混沌の時代に光を探る」 2012, 6: 37-48

ISSUE DATE:

2012-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179446>

RIGHT:

ポスト・インド洋津波の時代における bosai (防災)

京都大学地域研究統合情報センター 准教授 山本 博之

今日は主に3つの話題についてお話しさせていただきます。1つ目は、もしかしたらご来場の方々のなかに地域研究という学問は耳慣れないと感じる方もいるかもしれませんので、災害対応の地域研究とはどういう学問なのか、そしてそれを行っている地域研究統合情報センターとはどのような研究センターなのかについてお話させていただきます。2つ目は今日のメインのお話で、インドネシアのスマトラ社会における bosai (防災) についてです。ローマ字で bosai と書いているのは、日本発の防災が世界に通じる防災になるかという問題について考えたいと思っているためです。3つ目は「はかれないものをはかる」ということについてのお話です。時間の都合で場合によっては最後の方は幾つか端折って写真を何枚か見ていただくだけで終わってしまうかもしれませんが、おおよそそのような話題についてお話しできればと思っています。

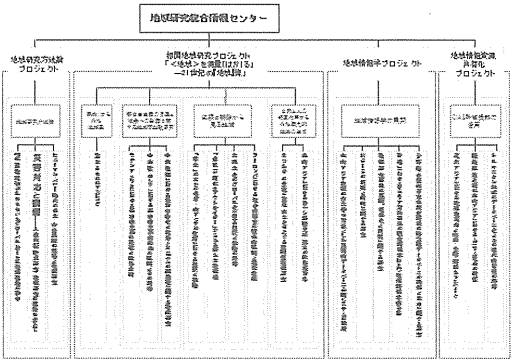
まず地域研究についてお話しします。私は京都大学の地域研究統合情報センターに所属しています。京都大学には防災を専門とする防災研究所があって、今日のシンポジウムでも後のスペシャル・セッションで防災研究所の先生方がお話しくださるわけですが、防災を専門にしない地域研究のセンターにいる私が防災についてお話をするのはなぜかということです。

これに答えるには地域研究とは何かをお話しする必要があります。長くお話ししようとすればいくらでも長くなりますが、なるべく手短にお話しすると次のようになります。伝統的な学問分野では、いつ、誰がどこで調査しても同じ結果になるものを積み上げて理論を作ってきました。ただし、それを応用する過程では、どうしても想定内と想定外に分けて考えざるを得ないところがあります。東日本大震災の後、研究者が想定外と言うのはけしからんという意見があります。私自身は、想定内に関してはきちんと対応するという責任意識の表われが想定外という言葉だと思うので、想定外と言うこと自体が無責任だとは思いませんが、それはともかく、現実の社会では、専門家が想定外だと言って何も対応してくれないのでは困るという意見もあるだろうと思います。そこで、想定外にどう対応するのか、しかも学術研究を通じて対応するにはどうすればよいかを提示するのが地域研究です。地域研究は、理学、工学、政治学、経済学、社会学というような伝統的な学問分野を一方で備えながら、もう一方で地域や現場をもとに伝統的な学問分野の理論を柔軟に改造して、伝統的な学問分野と現場を合わせた形で研究を進める学問です。災害研究の専門の先生方と、スマトラ地域を専門としてきた私たちとがいっしょに研究してきた結果として、スマトラにおける防災を考えてみたいと思います。

ところで、地域研究のセンターと言えば、京都大学には東南アジア研究所という東南アジアを

研究するセンターがあります。また、このあとお話いただく岩下先生のご所属先は北海道大学のスラブ研究センターで、これはスラブ地域を研究するセンターです。このように、いくつかの大学には特定の地域について研究するセンターや研究所があり、いずれも組織名に研究対象の地域名を付けています。これに対して、地域研究統合情報センターには特定地域の名称がついていません。これは、地球全体や世界全体を対象にする地域研究のセンターという大きな目的を背負ったセンターだからです。では、世界全体を対象とするセンターに、いったい何人の研究者がいて、どのようにして世界各地を研究しているのか、皆さん考えてみてください。世界に百数十カ国あって、それぞれを担当する研究者がいるとしたら、全部で200人くらいいると思うのでしょうか。実際の数は、12人です。どうでしょうか。ちょっと少ないと思うのでしょうか。

たった12人で世界全体をどうやって研究しているのでしょうか。地域研究統合情報センターには、活動のユニークな特徴として共同研究という仕組みがあります。詳しい説明は省略しますが、右の図のように、センターの各教員が研究グループを作って、それぞれの研究グループに関連するプロジェクトを広く公募して、国内外の研究者に集まって共同研究を進めていただいています。今年



度は、31の共同研究プロジェクトに実に200名の共同研究者が集まって共同研究を行っています。つまり、このセンターは、常勤の研究者は12人ですが、実際に研究活動に参加しているのは200人いるということです。なんとか世界全体をカバーできそうな数でしょうか。これを今日のメインのお話との関連で言えば、外部とのつながりのある、そして縫いしろの大きい研究センターだと思っていただければと思います。もっとも、最近では縫いしろがめいっぱい伸ばされている感があって、もう少し人が増えてもいいのではないかなと思うこともありますが、それはともかく、お話を進めます。

地域研究における災害対応とはどういうことでしょうか。災害の研究のためにいろいろな分野の先生方にお話を伺っていて興味深かったことに、学問分野によって災害や復興の捉え方が違うということがありました。都市工学の先生からは、都市の設計図が描けたときに、自分たちの中ではその被災地での復興に一段落がついたと考えると同いました。現場にまだ瓦礫が残っていても、その被災地での自分たちの役割は終わりで、別の被災地に移るというのです。それを聞いていた経済学の先生は、自分たちは、被災した地域の税収入が被災前の税収入と同じ程度まで戻った時点で復興と考えると話してくださいました。もともとその土地に住んでいて、被災して別の地域に行ったまま戻って来ない人がいたとして、その地域にもともと住んでいなかった人が入って来て税収が元通りの程度まで回復したら復興したとみるのかと尋ねると、そう考えるとの答えでした。それに対して社会学の先生は、いや、自分たちは被災地から外に出ていった人も含

めて、直接被災した人たち1人1人の生活水準が被災前の状況まで戻れるように手を貸したいし、そこまで戻れてようやく復興だと考えると、災害や復興の捉え方を巡って色々な意見が出ました。災害や復興をどう捉えるかは、学問分野によって大きく異なっています。

それでは、地域研究では災害をどのように捉えるのでしょうか。地域研究では、災害は日常生活の延長であると考えます。みなさんは、そう聞くと、当たり前だと思うのでしょうか、それとも変わった考え方だと思うのでしょうか。日常生活というのは日常が淡々と続いていることで、それに対して災害というのはある日突然に日常と違う状況が起こることで、災害とは日常生活から切り離された特別な時間と空間だと考える方もいるのではないかと思います。そう考えるならば、災害が起こったらもとの状況に戻すべきで、それによって日常生活が続いていくことになります。これは広く受け入れられている考え方だと思いますが、地域研究ではそう考えません。災害が起こるか起こらないかにかかわらず、それぞれの社会は潜在的な課題をいくつも抱えています。これらの課題には大きなものもあれば小さなものもあります。深刻な問題であるけれど、他のことを優先しなくてはいけないためにその課題には十分に対応できず、片目をつむって見逃し、そのままにしておくことも結構あるように思います。このように、日常生活では多くの社会がそれぞれ課題を持ったまま過ごしています。

災害時には、社会に外から大きな力が加わって、地面が揺れたり、大量の水が来たり、強い風が吹いたりすることで、その社会が潜在的に抱えていた課題が目に見える形になって現われるという特徴があります。そのため、災害とは日常生活と切り離された特別な時間や空間ではなく、日常生活の問題が極端に見えるかたちになった状況だと考えます。

そう考えるならば、災害に際して、その社会が潜在的に抱える課題が現れている状況で、もとに戻そうとすれば課題も元のまま残すことになります。そうではなく、災害が起こったら、それをきっかけに明らかになった社会の課題に働きかけてより良くしていくのが適切な復興であるはずです。最近では創造的復興という言い方を聞くこともありますが、考え方はほぼ同じです。

災害で明らかになった課題に働きかける復興を行うには、災害対応を時間と空間の中で捉えることが必要です。時間の広がりの中で捉えるというのは、地震や津波が起こって何人の方が亡くなり、どれだけの建物が壊れ、いくら分の損害が生じたという被災後の状況だけを考えてそれらを元に戻そうとするのではなく、被災した社会や人々が災害の前にどのような状況に置かれていたかを理解して、その課題に対応しようということです。空間の広がりの中で捉えるというのは、直接被害を受けた地域だけでなく、その外側にあって被災地と密接なつながりを持っている地域との関係において復興を考えるということです。東日本大震災で言えば、直接の被災地は東北地方ですが、それを東北地方だけの問題とせず、日本全体で被災に立ち向かおうとする考え方があります。これはまさに地域研究における「空間の広がりの中で捉える」という例だろうと思っています。もっとも、地域研究的な発想をもう少し広げれば、東日本大震災からの復興を考えるにあたって日本国内のつながりだけにとどめる必要はないわけですから、近隣諸国の中国、韓国、

ロシア、場合によってはアメリカとか、エネルギー問題だったら中東などの、世界とのつながりの中において復興を捉えることが大切です。それが地域研究的な災害対応、復興という考え方になるはずです。

さて、次にポスト・インド洋津波の時代の bosai についてお話しします。まずポスト・インド洋津波の時代の bosai とはどういうことかをお話ししなければならないかと思います。

インド洋津波は、ご存知のように 2004 年 12 月にインドネシアのスマトラ島沖で起こった地震をもとに発生した大きな津波です。それによって世界全体で約 22 万人の方が亡くなりました。ポスト・インド洋津波の時代というのは、インド洋津波以後の時代という意味で、具体的には災害対応が世界規模の課題となった時代です。それまでは、災害が起これば基本的にその国が対応していました。よその地域から救援に行く人がいたとしたら、自衛隊やレスキュー部隊やお医者さんなどのように、災害対応の専門性を持った人たちだけでした。しかし、ポスト・インド洋津波の時代では、災害対応の専門性を特に持たないような、つまり日常的に災害対応とあまり関わりのないような人々も、勤務先や市民団体を通じて、あるいは個人として、被災地を訪れて何らかの支援活動を行うことが見られるようになりました。このように、災害対応は国境を越えることが世界規模で共有されるようになったのがポスト・インド洋津波の時代だと言えます。

日本では、1995年の阪神・淡路大震災のときにボランティア元年と言われました。それから10年後のインド洋津波で、災害時のボランティア活動が国際規模で展開されるようになったということです。

日本の防災技術はとても高く、日本の最先端の防災の技術や知識、経験を学びたいという声が世界各地にあります。そのため日本はODAなどによって技術協力等を行ってきました。しかし、社会の仕組みや文化が違うため、日本の最先端の防災技術をそのまま外国に持って行っても通用するとは限りません。

そこで、漢字ではなくローマ字で bosai と書いてみましたが、日本が持っている最先端の防災の技術や知識、経験を世界の人々が受け取れるような形に変えるにはどうすればよいかについて、防災研究所の牧紀男先生や他大学の研究者といっしょに、スマトラ社会の歴史・文化を研究する地域研究の立場から考えてきました。

スマトラは、島の名前ですが、国で言えばインドネシアの一部で、インドネシアで最も西にある島がスマトラ島です。スマトラ島全体で、日本列島とほぼ同じか、それよりちょっと大きいくらいです。インド洋津波の被害を受けたのはスマトラ島の西北部で、地名で言うとアチェ州とその隣接地域ですが、今日は西北スマトラ地方と呼ぶことにします。面積はだいたい5万8000平方キロ、人口は被災前で430万人でしたので、日本の東北6県と比べてみると、面積はだいたい東北6県と同じくらい、人口は東北6県の半分くらいということになります。2004年12月26日に大きな地震が起こって津波が発生し、死者と行方不明者をあわせて西北スマトラ地方だけで約16万5000人に上り、家を失った人々は約50万人になりました。なお、死者と行

方不明者で16万5000人というのは西北スマトラ地方だけの数字で、この津波が及んだインド洋沿岸の他の国々での犠牲者数を合わせると約22万人になります。

日本の防災技術を伝えるためにいろいろな活動が行われてきましたが、それらを見ていると、現場ではいろいろと戸惑いがあるようです。技術を伝える側の戸惑いは、せっかく技術を教えても研修が終わると別の仕事に移ってしまったりするし、そうでなくても自分たちが教えた技術を現場の判断で勝手に変えてしまって、教えたことが相手に伝わらず、その結果、思った通りの成果が出ないということがありました。こういう話をするとう日本の最近の就職の現場でも同じだというお話を伺うこともあります。それはともかく、スマトラでは技術を伝える側が現場で工夫している様子が見られました。いろいろな工夫がありましたが、私はそれを大きく2つに分けて、日本文化型と国際標準型と呼んでいます。

日本文化型というのは、技術だけ伝えるのではなくて、その背後にある思想から教えようとするもので、手取り足取りといいましょうか、寝食を一緒にして技術の部分だけでなく思想を相手に伝えようとするものです。例えば、スマトラでは雨が降ったらその日は外で仕事ができないので、雨が降れば降るだけ納期が遅れることになります。でも、日本から行った技術者は、雨が降ろうがかんかん照りに晴れようが納期は守らなければならないと言って、雨が降って村人たちが雨宿りしている中、雨に濡れながら1人で作業するわけです。そうすると、雨の中で仕事する日本人は変わっているなどと思って見ていた人たちも、納期は大切だということを感じ取って、雨の中を一緒に作業するということがありました。この話だけとるとよい話のように聞こえるかもしれませんが、いつでも同じようになるとは限らないし、一度にたくさんの人に伝えるのは難しく、伝わるとしても少しずつしか伝わらないし、しかも伝わっても別の職場に移ってしまう可能性があるため、あまり効率がよくないという問題があります。

これに対して国際標準型は、技術を伝える相手に経験があるかないかを問わず、それに従って行動すれば同じ結果が得られるというマニュアルをしっかりと作って、マニュアルをもとに行動させ、現場で監督していれば期待した結果が出るという方法です。日本や国際機関等で作ったマニュアルをもとにインドネシアでプロジェクトを実施すると、かなりうまくいきます。これが進んでいくと、インドネシアの人々は、はじめのうちは日本人に与えられたマニュアルに従っていますが、しだいにマニュアルの内容を覚えていきます。そうすると、日本人がわざわざ日本から来る必要はなくなります。もし日本人がインドネシアを支援したいのであれば、自分は日本に留まってお金を稼いで、それをインドネシアに送ってインドネシア人に支援活動を行ってもらえば、より効率がよい支援ができることになります。国際標準の考え方を進めていけば、支援するのは日本人でなくてもいいためです。その考えはもっともですが、人道支援に携わる日本人スタッフがそれで納得するのかという問題もあります。

日本文化型も国際標準型も、それぞれ異文化の土地で支援活動を効果的に進めようという工夫ですが、どちらも不十分な面がありました。それは、スマトラ社会が、あるいは一般的に東南ア

アジア社会が、いったいどのような特徴を持った社会なのかという問いと関連しています。かつては、東南アジアは開発途上だから事業がうまく展開できないと言われました。その後、開発途上だからではなく、文化が異なるからだと考えられるようになりました。最も新しい地域研究の議論では、社会的流動性が高いからだと考えます。

社会的流動性が高いというのは、その場への人の出入りが著しく、転入や転出が頻繁だということです。その結果、知識や経験が場に蓄積されにくいということでもあります。集まって何かを決めたとしても、1ヶ月、2ヶ月したらメンバーの半分が別のところに行ってしまう、半分は別のところから来た人たちが入っていたりすると、1ヶ月前、2ヶ月前にその場で決めたことがどこかに行ってしまう。良い悪いではなく、そのような社会だということです。では、そのような社会で知識や経験をうまく活用するにはどうすればいいのでしょうか。スマトラ社会では、一つのところで頑張る一所懸命の考え方より、状況に応じて外の世界とどのようにつながるかを工夫することで難局を乗り越えるという考え方が発展しました。これが、社会的流動性が高い社会での危機対応のあり方です。

スマトラ社会では、基本的な生存基盤である家と仕事のそれぞれについて、形が定まっていません。家はしょっちゅう改築していて、例えば家族が増えるとそれにあわせて自分たちで家を増改築します。仕事も、常により良い仕事を探していて、より良い機会があったらどんどん転職していくという状況です。家はいつも直しているし、仕事はいつも探しているのですから、災害が起こっても、極端に言えば災害の翌日から家を直したり仕事探しをしたりすることになります。このことを写真を見ながらもう少し詳しくお話しします。

ご覧いただいているのは2007年のスマトラの地震津波のときの写真です。被災の翌日から屋根の修繕をしている人々がいたり、被災の翌日からコメやアブラヤシの収穫をしたりする人もいました。収穫したコメやアブラヤシは加工しなければなりません。通常ならオートバイや車に乗せて加工工場へ引き渡すのですが、地震と津波で加工工場が壊れてしまい、しかも道路が通れず、車もないという状況になりました。



それでも、動いている加工工場と車を探して、通れる道を探して、収穫したコメやアブラヤシを加工工場に持って行っていました。一つのところに依存するのではなく、何かあったらどこにつながるかを常に考えているため、災害があった時でも柔軟に対応して外とつながり、その結果としてうまく対応できていました。ここで大切なのは、何かあったときに全部自分だけで何とかしようとするのではなく、外部の人たちに助けを求めるということで、「つながり力」が大切です。

住宅に関しては、被災の翌日から改築していることに見られるように、増改築はずっと続いて

いきます。復興住宅を建てることになって、建てる時には復興住宅は6メートル×6メートルの広さにすると支援団体が決めたとしても、それを被災者に渡せば1年後や2年後には必ず増改築しているはずです。したがって、はじめから増改築することを念頭に置いて、その分の「縫いしろ」を十分にとって復興住宅を造る必要があります。

家と仕事の話からもわかるように、社会的流動性が高い社会では、危機的状況に対応するために「つながり力」と「縫いしろ」の2つが大切です。スマトラの人々は、この2つによって環境や社会の変化に柔軟に対応してきました。

さて、まだ少し時間がありますので、最後に「はかれないものをはかる」というお話をさせていただきます。

先ほど言ったように、社会によって事情が違うため、地域ごとに様子を見抜く必要があります。

では、どうやって地域の様子を見抜くのか。その方法の一つとして、「はかれないものをどうはかるか」という問いに関する一つの例をお話したいと思います。

「はかれないもの」と「はかれるもの」と言いましたが、「数えられるもの」と「数えられないもの」と置き換えて考えていただいても結構です。災害復興でわかりやすい例を挙げれば、「数えられるもの」というのは住まいや仕事の被害や回復の程度で、「数えられないもの」は心や記憶とかいったものになるかと思います。

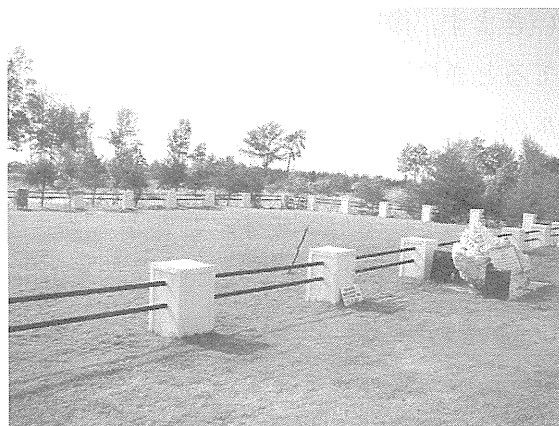
「数えられるもの」と「数えられないもの」は、どちらも重要です。ここで私が強調したいのは、「数えられるもの」と「数えられないもの」は別々のものではなく、「数えられないもの」は「数えられるもの」の裏側に張り付いているということです。そのため、「数えられるもの」を見たときに、その裏に「数えられないもの」をどう見るかが大切になります。

地震は建物が崩れるのでご遺体が亡くなった場所に留まり、瓦礫等を取り除いていけばご遺体を見つけることができますが、津波だと流されてしまうので、津波で亡くなった人のご遺体はどこに行ったかわからないし、あるいは誰だかわからないご遺体が出てくるということもあります。東日本大震災でもそうですが、スマトラの津波でも、身近な人の遺体が見つからないまま、あるいは目の前にある身元不明の遺体に対して、どのように弔うかが問題になりました。

2004年の津波で、被災地となった西北スマトラ地方では集団埋葬地をつくりました。写真を



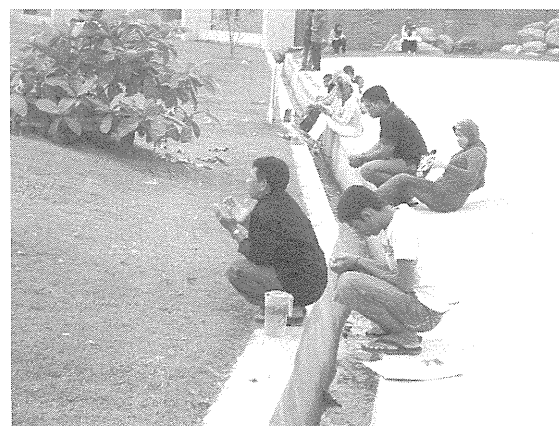
見ていただくとわかるように、柵で囲って人や動物が中に入れないようになっていて、中には芝生がきれいに整えられています。管理人がいつでもきれいに整えています。外側に碑があって集団埋葬地が作られた理由が書かれています。埋葬地の中には墓碑のようなものはありません。次の写真は別の集団埋葬地で、芝生の部分の真ん中に砂利道があって、砂利道のところに人が入っていて、芝生のところには人が入っていません。奥に津波で被害を受けたときのまま建物が残っているのが見えます。このような集団埋葬地が市内に10か所あって、全部で約7万3000体の遺体が埋葬されています。どこに誰が埋まっているかはもちろんわかりません。大人の遺体、子どもの遺体という看板を立ててあって、だいたい大人はこの辺に、子どもはこの辺にというくらいの曖昧さで埋葬されています。



津波が起こった日である12月26日、人々は集団埋葬地に集まってきます。イスラム教徒はお墓参りで故人にかわってコーランの一節を詠んであげる習慣があるので、芝生には入らず、おそらくあの辺りに埋葬されているだろうなと思いつつ、想像上の遺体の方に向かってコーランを詠むことを毎年12月26日に行っています。



この集団埋葬地は、日本の報道や研究では共同墓地と書かれることがあります。言わんとするところはわかりますが、私は共同墓地ではなく集団埋葬地と呼ぶべきだと思っています。墓地と埋葬地は明確に違います。イスラム教徒にとって、墓地というのは遺体を清めてから埋葬する場所で、そこには必ず遺体が埋葬されていて、誰が埋葬されているか名前と命日が記され



た墓碑が置かれています。また、墓地を訪れるのは命日ではなく、断食月が開けたときです。自分たちでお墓のまわりの草刈りをして、お墓のまわりに座ってコーランの一節を詠みます。これがイスラム教徒にとってのお墓です。これに対して、西北スマトラ地方の集団埋葬地では、短期間にたくさんの遺体を埋葬せざるを得なかったため、1つ1つの遺体を清めることはできま

せんでした。また、身近な人がどこに埋葬されているかも確信できません。遺体はトラックに載せて埋葬地に運ばれましたが、目的とされた埋葬地が遺体でいっぱいだとその場の判断で別の埋葬地を探すこともあり、市内10カ所のうちどこに埋葬されているかは結局わかりません。そのため、ここに誰が眠っているという1人1人の墓碑はつくられていません。また、この場所を訪問するのは、断食明けではなく、命日にあたる12月26日です。しかも、自分たちで草刈りをするのではなく、遺体が埋葬されている場所は管理人によってきれいに整えられており、訪れた人が足を踏み入れることはできません。せいぜい、おそらくその辺りに埋葬されているだろうと思ひながらコーランを詠むだけです。

だから、これは西北スマトラ地方の人々が考える伝統的な意味での墓地ではないのです。しかし、伝統的な考え方では墓地ではないはずなのにもかかわらず、今でも多くの人が命日のたびにこの場所を訪れてコーランを詠んでいます。それは、身近な人が突然いなくなってどこに行ってしまったかわからない状況でも弔おうとする西北スマトラ地域の人々の工夫ではないかと思ひます。西北スマトラ地域の人々は、身近な人を失ひ、遺体を見つけることができなかった人も、身元がわからない遺体を見つけると、それぞれ自分の最寄りの集団埋葬地で埋葬しました。自分が身元のわからない遺体を埋葬したということは、別の集団埋葬地でも誰かが身元のわからない遺体を埋葬しているはずです。そうであれば、自分の身近な人は、どこかで野ざらしになっているのではなく、きっとどこかの埋葬地で埋葬されているに違ひありません。そのことを確かめることはできないけれど、きっとどこかで人の手によって埋葬されているはずだということを、社会全体でお互ひに担保しあっているのがアチェの集団埋葬地のあり方なのではないかと思ひます。

ただし、きっとどこかで埋葬されていると思うだけでは弔ひの気持ちが十分に満たされないと思ひえる人もいます。そういう人たちが行っていることの1つが、遺体を集団埋葬地から掘り返して村の墓地に埋め直す再埋葬です。

この写真はある村の墓地です。集団埋葬地と違って木や草がたくさん生えています。津波後に訪れると、新しい墓碑がいくつも立てられていました。生まれた年はさまざまで、70歳で亡くなった人も、30歳で亡くなった人も、1歳や2歳で亡くなった人たちもいましたが、どれも2004年12月26日に亡くなったと書かれていました。



これは津波から2年後に訪れたときの写真（次頁）です。墓地に大きな穴が掘られています、これは遺体の再埋葬用に掘られた穴です。津波直後は日常生活を取り戻すのに精いっぱい、身近な人の遺体がある場所がわかっていても、日々の復興に追われてそれ以上のことはできませんでした。津波から2年経って生活が落ち着いて

きた頃、集団埋葬地に埋められているはずの家族や親戚の遺体を掘り起こして、自分の村の墓地に持ち帰って再埋葬する人たちが現われ、村の墓地では再埋葬のための穴がいくつも掘られました。埋葬時に目印をつけておいて幸運にも遺体を見つけることができれば、村の墓地に埋葬しなおして、墓碑を立て、そうして名前を持った遺体として弔うことができます。ただし、すべての遺体を見つけて再埋葬できるわけではなく、写真のように、遺体が見つからないためか、半年経っても墓地に穴が開いたままになってい



ました。さらに1年後に訪れても、穴は同じところに開いたまま、草に覆われていました。墓地に掘られた穴が空いたままになっているように、身近な人を失った人たちの心の穴もまた空いたままになっているのかもしれません。

亡くなった人の弔い方に関して、もう1つ、お土産物屋さんの例をお話しします。この写真は先ほど見ていただいた村の墓地のそばで、もともと海岸の住宅地で家がたくさん並んでいた



地区ですが、津波によって建物が全部流されてしまった場所です。文字通りすべての建物が流されて平地になって、モスクだけが残ったため、テレビ報道などでご覧になった方もいるかと思います。この写真は津波から2カ月後の様子で、建物はほとんど何もなく、テントがあるだけです。ここにトルコからの支援が入って復興住宅が建てられました。津波前は1200世帯が住んでいましたが、700世帯になったため、700棟の住宅が建てられ、被災者に渡されました。

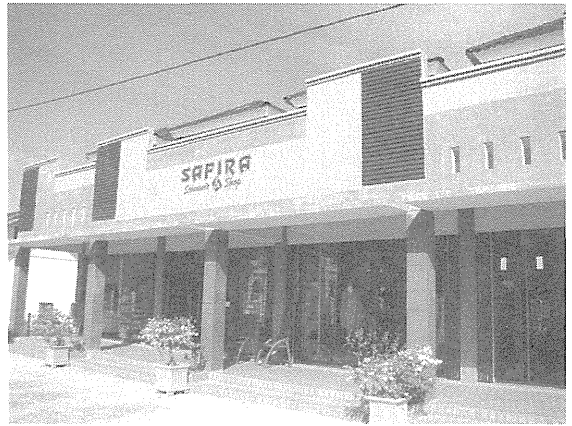
復興住宅は完成しましたが、なかなか入居者が増えず、空き家が多いと報道され続けました。700棟が必要だと言うので700棟を建てたのに空き家が多いとは、誰が悪いのか。行政か、支援団体か、建設業者か、それとも被災者か、といった議論が重ねられました。「数えられるもの」と「数えられないもの」という言い方をするならば、これは700棟という「数えられるもの」を巡っていろいろな議論がなされたということです。

このような状況で、ただでさえ空き家があるのはよろしくないのに、この復興住宅を2棟使ってお土産物屋にした人が現われました。この写真（次頁）がそれで、店の名前はサフィラと書かれています。

こんな場所に土産物屋を建てるのかと思うかもしれませんが、建物が津波で全部流されてしまったけれどモスクだけ残ったので、津波の規模の大きさを体感しようとするこの地区を訪れる人も

多く、そこに土産物屋を出すというのもわからなくはありません。

店は2つの住宅をつなげたもので、向かって左側は食料品屋、右側は服屋です。たいした土産物屋ではなく、食料品屋に入っても子ども用のお菓子やジュースぐらいしかありません。服屋は、この写真で写っているのはイスラム教徒向けの大人の女性の服ばかりですが、写真に写っていないところには、町で売られているようなミッキーマウスなどの刺繍がついた子ども向けのTシャツばかり並べられていました。ここに来て買い物するお客はほとんど町の人でしょうから、わざわざ町で買えるTシャツを並べるなんて変な品揃えの店だと思いました。ところが、いろいろ見ていると、店の奥に額に入った女の子の写真が飾ってあって、そこに「2004年12月26日、津波の犠牲で亡くなった私たちの1人娘サフィラ」と書かれていました。

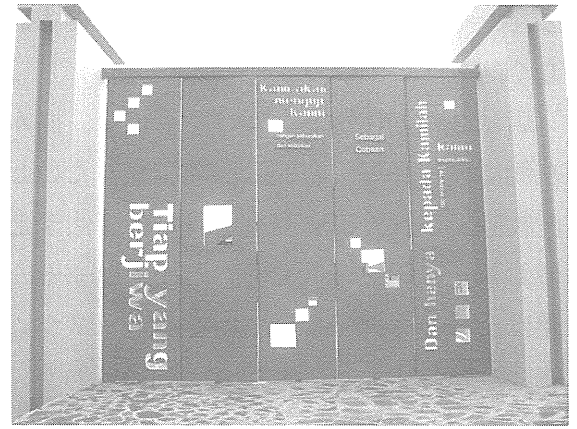
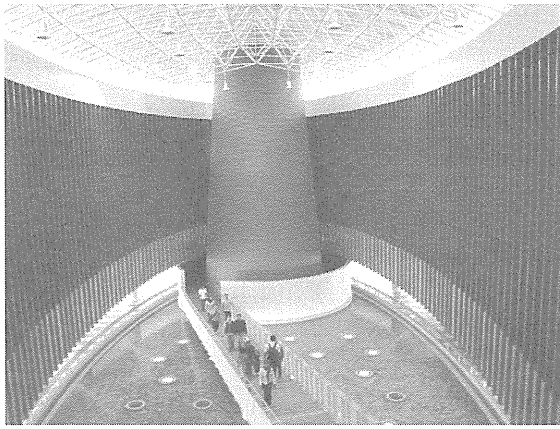


この額を見て、この土産物屋の意味がわかりました。サフィラというお店の名前はこの女の子の名前をとったものでした。かわいい刺繍入りのTシャツや、大人のイスラム教徒の女性が着る服は、もうサフィラちゃんに服を買って着せてあげることができなくなったお父さんやお母さんが買ってあげた服だったのです。子ども用のジュースやお菓子しか置いていない隣の食料品屋は、サフィラちゃんの喉が渇かないように、お腹が空かないように、サフィラちゃんに用意したものだったのです。

これは、いわばサフィラちゃんのお墓なのです。名前と命日が入った額が墓碑のかわりで、お土産物屋さん全体でサフィラちゃんを吊っているのです。

先ほどお話ししたように、この地区には700棟の住宅が必要だと言われて支援団体が700棟の復興住宅を作ったけれど、空き家のままになった家が多いことが問題になりました。土産物屋に改造すると、明らかにそこに住まないわけですから、さらに大きな問題になります。しかし、土産物屋のサフィラの例のように、「数えられるもの」である700棟という数字を取り上げ、それに満たなかった理由を1つ1つ調べていくとその裏側に「数えられないもの」が張り付いていることがわかります。

誤解していただきたくないので繰り返しますが、私は、「数えられるもの」と「数えられないもの」は別物なので、「数えられるもの」ばかり見るのはやめて「数えられないもの」にも目を



向けようと言っているのではありません。「数えられるもの」と「数えられないもの」はいつも一緒にあります。「数えられないもの」は、いつも「数えられるもの」の裏側に張り付いています。だから、「数えられるもの」を見て、数値が目標に達していないから努力が足りないと批判するのではなく、その裏に何があるのかを考えてみるのが大切なのです。「数えられるもの」を見ることは大切ですが、それは「数えられるもの」そのものが大切なのではなく、その裏にある「数えられないもの」を見つけるきっかけになるという意味で大切なのです。

このほかに、アチエの津波博物館のお話や、集団埋葬地のゲートに書かれた言葉の話も用意していたのですが、もう時間がありませんので別の機会にお話しさせていただくことにします。

最後に、今日お話しした3つのことをまとめておきます。1つめは、「災害は日常生活の延長上にある」ということです。したがって、災害対応や復興を考えるときには被災後だけや被災地だけを見るのではなく、時間と空間の広がりの中で被災と復興を捉える必要があります。2つめは、流動性の高さという観点を取り入れて防災や復興を考えることが大切で、そこでは「つながり力」と「縫いしろ」という2つのキーワードが重要になります。そして3つめは、「数えられるもの」の裏には「数えられないもの」が張り付いているということです。今日は空き家が多いと言われた復興住宅で土産物屋を通じた娘の弔いの例をご紹介しましたが、「数えられるもの」の裏に「数えられないもの」が張り付いているというのは災害復興だけに限りません。私たちはいろいろな場面で数値による評価を受けています。数値による評価自体は1つの方法として妥当性があると思いますが、数値を満たしていないものを見たときに、どうして数値を満たしていないのかと怒るのではなく、その裏に張り付いている「数えられないもの」を見つけるきっかけとして受け止めることが、災害復興を含めた私たちの暮らしのさまざまな場面で大切になるのではないかと思います。